

『LIVING HIROSHIMA (生きているヒロシマ)』

写真原稿一覧

平成21年(2009)7月

広島県立文書館

凡 例

- このpdfファイルには、当館が所蔵する「広島市 田中嗣三資料」に含まれる『LIVING HIROSHIMA』(昭和24年刊)の写真原稿(請求記号 200526/4)の縮小画像と和文キャプションを収載した。
- 和文キャプションは、同書別冊「生きているヒロシマ」に掲載されているものをそのまま使用し、誤字と思われる部分には適宜()で補記した。
- 写真原稿と完成本では、写真の選択や配置に異動があるが、それについては、必要に応じ()で備考を記した。

『LIVING HIROSHIMA』 写真原画・説明文(キャプション) リスト



9頁 われわれは、軍部が撮影を禁止していたヒロシマの戦前の航空写真をここにみることができる。諸君は森に囲まれた四角い区域の手前の角にヒロシマ城を容易に見つけ出すだらう。この森の中央部には日清戦争のとき天皇の指揮所だった大本営の建物がみえる。左側の川縁にある森が今度の爆撃で一つの悲劇を生んだアサノ泉邸である。右上部の空白は練兵場であり、ここから右へ約300メートルの地点が爆心地である。われわれはこのグラフの頁を繰って行く内に、地上から一そう接近してこれらの悲惨な被害場所を見るであろう。



11頁 われわれは今から140年前のヒロシマの絵図をここに見ることができる。第11ページの橋はモトヤス橋である。この橋の上の人人は何百年か後に彼等の子孫の頭上で爆発する恐ろしい物体のことを夢にも想像しなかった。この橋は後に改修されたがわれわれは爆心地から200メートルしか離れていないモトヤス橋の悲しい姿をもっと近づいて見る機会をもつだらう。



12頁 (右下) うち倒される直前のヒロシマ城



13頁 1945年8月6日

爆心地から2,700メートルの場所で、爆発直後に地上から撮影された世界唯一の「ヒロシマの雲」である。生物の生命を根こそぎにする恐ろしいエネルギーがこの中にある。雲を見守っている余裕のあった人々は、口をそろえてこの毒雲の美しい色彩に就いて語っている。



14-15頁 原子砂漠 爆心地附近の展望

商工会議所の屋上から爆心地附近を俯瞰撮影したもの。爆心地のシンボルのように今も尚破壊されたまま建っている丸天井の建物は産業奨励館である。この建物の直ぐ向う側の橋がモトヤス橋、右図のT字形の橋はアイオイ橋、この橋の向うに見える三階建のコンクリート建築物はホンカワ小学校である。これらの破壊物をわれわれはあとのページで、もっと接近して見るであらう。建築物、植物、人間等の被害状況の調査によって、実際の爆心地は、左ページの丸天井の建物の前から左へ走っている道路の交叉点上空と推定された。爆発の高度は、或る人は600メートルといい、或る人は1,000メートル、又或る人は1,500メートルと知っているが、正確な高度は今尚秘密にされている。しかし、地上近くでそれが爆発すれば、一切のものが蒸発してしまうと称される原子爆弾の偉力を、ヒロシマは決して疑わないであろう。

(14頁右側写真なし)



18頁 爆心地に近い繁華街の廃墟

朝の出勤のため急いで街を歩いていた市民、満員の電車やバスに乗って通り合せた人々は、ことごとく「死の光線」に打ちたおされた。右側の建物はデパートであり、曲った鉄骨の残骸は劇場である。



19頁 (左上) ドバン附近。爆心地から約1,000メートル。最も死者の多かった場所である。この附近の復興をわれわれは43ページで見るであろう。
(左下) 瓦礫の街。爆心地から200メートルの地点に立って繁華街を望む。八階建の建物はわれわれが前ページでみたデパートである。
(右上) 国泰寺のクスの木。この有名なクスの大樹も、天然保護物としての名誉と生命とを一瞬にして奪い去られた。
(右下) 広島病院の跡。爆発の殆ど真下にあった建物である。いろいろな調査の重要な対象となった。



20頁 (左上、下) 爆心地のシンボル産業奨励館 (左に掲示した写真では右上) 爆心地の表徴。この建物が生きていた時は、ヒロシマの産物や世界各国の商品を陳列して、ヒロシマ県の商業取引の便宜と発展のために活動していたのである。ヒロシマを訪れる人は必ずこの建物に近ずき、一しおの感慨をこめて見上げ見下ろし、平和への希求を新たにする。
(右上、下) アイオイ橋。上はわれわれが既に15ページでみたアイオイ橋の生ける日の姿である。ヒロシマで最も近代的な橋も、あの瞬間悲惨な骸となった。(左に掲示した写真では左上と右下)(下) その当時日本の学者たちは、爆風の中心と力を測定するための一資料として、この橋の橋柱を調査した。(左に掲示した写真では右下、完成本では左下の写真は未使用)



23頁 爆心地から異った距離の三種の石造物

(左上) ヒロシマ神社。爆心地から最も近いヒロシマ神社の境内に於ける石造手洗容器の転倒。
(左下) ミヨウジョウ寺の番兵。大男で力の強いニオウという仏の弟子も、原子爆弾に対しては一瞬間の抵抗もできなかった。彼はヒロシマ神社から更に1,700メートルも距った寺を守っていた。
(右) コクタイ寺の墓石。小さい、背の低い墓石たちは、耳も目も持たなかったから、その朝の事件を今尚大地震だったと信じているだろう。



24頁 ダンバラ町の民家の屋根。(爆心地から2,000メートル以上)



25頁 日本赤十字ヒロシマ病院前にて。



26頁 植物も決して例外ではなかった。

(左) 毛髪は脱け洋服を吹き飛ばされたセンチ園の松。
(右) 気の毒な火傷の半面を持っているミタキ町の竹。



27頁 (左) 頭に黒い三日月を作られたコイ町のダイダイ少年。
(右) ヒロシマ城に仕えていたヒイラギ少女は貴重な髪飾りを傷つけられた。



28頁 (左上) センテイ園に近いテイシン病院では翌日から原爆患者の治療をはじめた。

(左下) テイシン病院では特別の簡単な研究室を建て、そこで死体の解剖と研究をはじめた。

(右上) 調査団が組織され、あらゆる調査に活動した。

(右下) 爆心地の島病院附近で放射能の測定をする調査団のメンバー。



29頁 軍国日本のフィナーレ

(左上) 兵器廠跡。原子爆弾の閃光は如何なる秘密の場所にも及んだ。

(左下) 大本営跡。この記念建物はメイジ天皇の用品と共に消滅した。

(右) 城の残骸。トノサマの陣地は木片の集積と化した。



30頁 平和建設への序曲。



31頁 歴史的な運命の日から3年がめぐってきた。^(くカ) 城跡の上空に浮かぶ雲は、もはや、人類の絶滅を暗示するあの恐ろしい原子雲ではない。「原子沙漠」の土は早くも植物をよみがえらせて自然の勝利を歌い、人々の勇気と愛とを呼びさます。その記念日が来る頃、毎年、ヒロシマのここかしこの池にハスが白い花を開く。キリスト教の十字架章に相当するこのハスは、未来の福祉と安楽とを表徴する植物として、仏教の盛んな日本では広く知れわたっている。苦難と犠牲の十字架を背負ったヒロシマが、人類の不名誉を再び繰り返さないよう世界に呼びかけるのは彼の栄ある権利であろう。



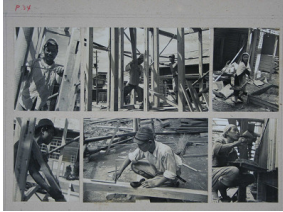
33-34頁 光りの子 (完成本では32-33頁が正しい)

田岡ひで子夫人は丁度あの世紀の瞬間に爆心地から(500)メートルの電車の中にいた。外へ出た時そこに顔の皮や胸の皮がむけてぶらりと垂れ下っている奇怪な動物たちのうごめきをみた。桃色の肉をむき出しにして、ふらふらしているそれらの動物が人間だとはどうしても信ぜられなかった。——間もなく彼等は平和への犠牲として死んで行ったのである。彼女は何故自分だけが助かったのか未だに分からない。彼女はしかし典型的な原爆症にかかった。毛髪は脱げ、下痢や嘔吐がつづき、身体には気味のわるい斑紋が現われて痩せおとろえた。回復の兆候がみえはじめたその年の暮に彼女は妊娠した。翌年の9月に月美嬢を生んだ。彼女とその子は、今、美しく健全である。(左)

田岡月美嬢だけではない。いかなる子供もすべてヒロシマの光りである。あの瞬間は、子供は子供なりの受難であった。しかし彼等は復讐を考えない。神の如く純粋な生命をみなぎらせて、おとなたちの胸に明るい希望を供給している。——イツカイチの孤児収容所の子供たち(中)

(右) 爆心地の一隅に「平和の樹」がある。あの日を誕生日としてヒロシマの子供たちと共に成長しつつあるこの樹は、無言で「神の国の如き世界」の出現を主張している。

われわれはできるだけ正直に回復しつつあるヒロシマの姿をみて行くだらう。ヒロシマの苦難は全く終わったわけではない…。



34-35頁 まず建築がはじまった

今も昔も変わりなく、木と紙と土の民家が次々と建てられて行く。
殆ど機械力を借りずに建てる原始的な方法が諸君の注意を引くであろう。



36頁 人々は帰ってきた。人々は生活をはじめた。
爆心地から200メートル、カミヤ町の交叉点。



37頁 街を歩くと、われわれは、顔、手、足に生々しい傷痕を残している人々によく出逢う。それらの人々は、われわれが何かで宇頂点になっているときでも。たちまち、われわれをして、厳しい人道主義者にさせてしまうのである。

(上左、右) ヒラタヤ町の人通り
(下左) カミヤ町電車停留場
(下中) 手に傷のある若もの
(下右) ヒロシマ駅前バス停留場



38頁 人々は瓦礫の街にもどって店を構えた。

あの当時、ヒロシマを通過しただけでも放射能の悪い影響を受けると噂されたので、疎開した人々は容易にもどって来なかった。1時、13万人に減った人口は、しかし、第3年目にはもう24万人になっていた。

(上左) これはヒロシマで育った花です。
(上右) 仏教信者のための祭壇を売る店
(下左) 玩具屋は諷刺家。日本海軍将校を描いた看板をごらん下さい。
(下右) 書店、1冊どれでも20円。



39頁 (上左)「手をふれずにごらん下さい。」焼けあとから拾い集めた珍品揃いです。

(上右) 釣道具一切。
(下左) 日本の台所用具。
(下中) アメリカン、スタイル、ショップ。
(下右) 戦後の日本にはドロボウ、ゴウトウの大流行。



40頁 (左) 原子爆弾のために裸にされた木には、今やホテルの広告看板やポスターが木の葉の変わりに密生している。この木の下には戦災浮浪児が傷のある脚を投げ出し、力のない小さい手で客の靴を磨いていた。 ヒロシマ駅前。

(中) 靴一足買えない人々はボロになった靴を大道の靴直しに修繕させて一そうボロになるまで使い古す。日本では、今、靴一足を買うのに1ヶ月分の給料を全部支払わなければならない。 ヒロシマ駅前。

(右) この樹木はアダムのように立っている。その木の下を往来している人々をじっとみていると、あらゆる人が聖書の道を歩いているかのようにわれわれには思われてくる。 ヒロシマ駅前。



41頁 (左) 原子爆弾の悲劇を予言することのできなかったこの予言者は、戦後の迷える人々を救おうと、しきりに彼の「善意」を示している。悲劇を避けたいのは凡ての人の本能である。 ヒロシマ駅前。

(中) 女学生とティ・ルーム彼女たちは今尚日本水兵の制服を型どった制服を着ている。爆心地に近いところに居合せた女学生たちは、この制服の白いエリの部分だけ残されて裸にされた上、全身火傷を負い、声もなく死んで行った。

(右) まるで、あの「世紀の閃光」から何の影響をも受けなかったかのように昔そのままの姿で立っている一人の女がいる。彼女は刃物屋の看板である。しかし、

彼女は一度消滅して新しく作りなおされたのである。 ヒラタヤ町。



42-43頁 (被災した直後と復興しつつある同じ場所の対照)
(左上)カミヤ町 (左中)ヒロシマ駅 (左下)ヨコガワ駅前。
(中上)ヒラタヤ通り (中中)オナガ町の寺院
(中下)デンテツ前停留所附近。
(右上)フクロ町小学校 (右中)ダンバラ、ヒガシウラ通り
(右下)ドバシ附近。



44-45頁 3年前に眺めた「死せる都市」をわれわれは今同じ場所(中国新聞社屋上)に立って同じ角度で見わたすことができる。諸君はこれら二つのコントラストされた図の中に例のデパートやタニモト牧師の教会を見出すであろう。左から3枚目にあるのがデパートで右のページの左の写真の中にあるのが教会である。
(44頁の写真原稿なし)



46頁 1947年11月、人間天皇がヒロシマ市庁の屋上に立って、復興しつつある街を眺めた。ヒロシマの歴史を知る人は天皇の訪問を受けて、更に生きる力を与えられるヒロシマ市民の感情を容易に想像することができるであろう。
(実際の使用写真とは異なる)



47頁 (右上)全世界を震撼させた原爆中心地では、毎年8月6日に、世界平和の祈願祭が行われる。ヒロシマ市民は世界に向かって、この平和祭が、もっと熱烈に盛大に挙行され、もっと立派な平和塔が建設されるよう、人々の積極的参加を望んでいる。
(実際の使用写真とは異なる)
(左下)天皇と対面したヒロシマ市民は、「戦争」を世界から叩き出す決意を新にした。1人1人の顔をごらん下さい。日本人の希望と性格をよく表している。
(写真原稿なし)



48-49頁 不幸な「光りの子」

(左)爆心地に近い寺では、不幸な「光りの子」たちが集ってヒロシマの未来の歌を合唱する。
(中)本川小学校の建物をわれわれは15ページでみた。この学校の不幸な「光りの子」たちのために、アメリカ、ミネソタ州のオスチン町にある3つの小学校から沢山の絵本が贈られた。すさびがちな彼等の心に美しい絵本がどんなに楽しいものか想像して下さい。
(右)本川小学校の校庭。学童たちの集団生活は不思議に明るいが、しかし1人1人の子供たちはそれぞれ何かの不幸な物語を持っている。



50頁 そうだ！1人1人の「光りの子」たちは、それぞれの不幸を背負っている。

父のない子、母のない子、家のない子、兄妹や友だちから急に1人ぼっちになった子——しかし彼等はたちまち新しい友だちをつくり、新しい環境をつくる。この生命力は、又新しいヒロシマをつくる「希望」である。

(左上) アイオイ橋の曲った橋縁に立つ親のない兄弟。

(左下) 夕食の料理のために釣をする父と子。

(右) この庭園で各自の兄妹を失った3人が新しく友だちになった。——泉邸で



51頁 ここはちょうど爆心地である。姉とその小さい妹には父がない。ここにたった1人で装身具の店を守っていた父は一瞬間の間に醜い骸となった。彼の家族は疎開先から帰ってきて父の店を再建した。——夕暮がせまる頃、殆ど毎日のように爆心地を眺めては物を思っている姉と妹とを、人々は自分自身の姿をみるように見るのである。



52頁 原子孤児の集り

父もない、母もない、兄妹もない孤児たちの何十人かが広島郊外五日市町の育成所で家族同様に暮している。父となれ！母となれ！人類救済の天使となれ！！

(上中) 共通の母の手を借りて着換えする幼児たち。

(上右) 雑談と童話のときを持つ学童たち。

(下左) 男学童37名、女学童23名の晩餐。

(下中) 13名の幼児は別に寮母の接待を受ける。

(下右) 学童はそれぞれの能力に応じたレッスンの時間を持つ。



53頁 (上左) 僧侶になった5人の孤児

(下左) 着換え

(下中) 仏壇の前で

(下右) 経文の合唱

(上右) 年上の少年が打ち鳴らす鐘は世界の人人の心の耳を要求する。——鐘楼で——

その記念日がきた。5人の少年僧は犠牲者の霊を慰めるため祭壇に向って合掌する。彼等の無心の声は彼等自身の不幸な思い出を誘い出すと同時に、切々たる人類への愛情を歌い上げる。戦争をするな！戦争は罪悪だ！！



54頁 爆心地で

(左) その記念日に例の産業奨励館の残骸に最も接近してみれば、繁った草原の中に誰がそなたか、ここで父母と共に死んだ子供たちのために灯りと花が捧げられている。

(右上) われわれは、そこにふと忘れ難い物体の名を記念した書店を発見して、ここにそれを記録する。

(右下) 又、われわれは豊かに育った野菜畑を発見してカメラを向ける。しかし原子爆弾の効力を過小評価するためにではない。ヒロシマ復興に捧げる単純な喜びの故にである。



55頁 (左上) 爆心地附近の子供たちも、単純な彼等自身の喜びの祝日を持つことができた。

(左下) そこには児童のための文化会館が設立されている。

(右) 父母の墓前。



56頁 平和と愛への祈り

ジョン、ハーシーの「ヒロシマ」によって諸君はタニモト牧師とクラインゾルゲ神父の2人の名を知っている。浅野泉邸に於ける彼等の勇気と愛に富んだその日の行為がどんなに美しいものであったかを思い出すだろう。彼等は今破壊された教会を建て直して、熱心な信者と共に平和と愛の道を歩んでいる。

(左) クラインゾルゲ神父の幟町カトリック教会
(右) 谷本牧師の上流川町メソジスト教会。



57頁 神の前には人類は等しく兄弟である。不幸な運命の体験の後に人々は兄弟愛の道を一そう深く理解した。谷本牧師のメソジスト教会も亦広島の未来へ1つの道を拓いている。

(左) 讃美歌。
(上左) メソジスト教会外観、(上右) タニモト牧師。

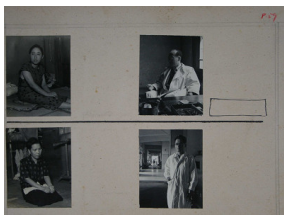


58頁 ハーシーの「ヒロシマ」に登場する6人の受難者

ハーシーは原爆投下の翌春に、広島へ来て6人の犠牲者にもとずいて原爆のもたらした恐ろしい悲劇を描写した。これは人道主義的な立場に立つ一種の被害調査であり、又、すぐれた報告文学である。1946年8月31日発行のニューヨーカー誌に、その全文が発表されて、全世界にセンセーションをまき起した。それは間もなく単行本としてニューヨークのアルフレッド・A・ノップ書店から発行されベストセラーの名をつらねた。

谷本清牧師(右上)は教会の荷物を疎開するため己斐町へ運んで行く。爆心地から西方3,200メートルの目的地へついて一休みしている時彼はあの閃光を見た。ハーシーの「ヒロシマ」の読者から彼のところへ沢山の手紙が届けられた。すべて谷本牧師だけに宛てられたものでなく、それらはヒロシマへの同情と戦争への反省に充ちている。谷本牧師は、ヒロシマ市民がそれらの世界からの呼びかけに答えて、世界平和のために友愛の花を咲かせてくれることを望んでいる。

クラインゾルゲ神父(右下)は幟町の教会で新聞を読んでいる時、あの恐ろしい光りに襲われた。彼は今でも身体の調子が悪く時々入院をする。この写真はわれわれの手によって東京の国際聖母病院で撮影された。このとき彼は白血球が2,000くらいしかないと告白していた。しかし彼の教会とその庭園はすっかりそのまま、焼ける前と同じに再現された。彼はハーシーの「ヒロシマ」の中へ現われる他の5人の人人の親しい友人であることを楽しみとして、彼等の幸福を心から望んでいる。



59頁 佐々木とし子嬢(左上)は観音町の勤務先で自分の机に腰をかけ、隣席の娘と話しているとき爆風に打ちたおされた。彼女は孤独な境遇と彼女の原爆症を癒やすため、いま、別府温泉の「光りの園」修道院にいる。ハーシーによって世界に紹介されて以来、沢山の新聞記者やその他の訪問者が彼女の体験談を聞いてはサインを求めて行くので、今では話も字も非常に巧くなっている。

中村初代さん(左下)は爆心地から1,070メートルの自宅の台所から隣の家を眺めているとき原子爆弾の閃光に出逢った。破壊した家の下になった3人の子供たちを救うため彼女の母性愛は日頃のない強さと執拗さを示した。

戦死をした夫が彼女に助力したと彼女は信じている。今、幟町のバラックで彼女は他人の縫仕事をすることによって子供たちを養いながらその幸福な未来をみつめている。

藤井正和博士(右上)は爆心地から1,400メートルの彼のプライベート病院で不幸な災難に遭った。彼はその時ポーチの上で朝日新聞を読んでいた。閃光と同時に彼の病院は京橋川の中へ転落した。その後、彼は海田市町に避難していたが、最近元の場所に新築して再び病人の治療に従事している。

佐々木輝文博士(右下)は日本赤十字広島病院の若い外科医である。彼は患者からとった血液を検査するため三階の実験室へ行こうとして一階の廊下を通りかかった時あの瞬間を経験した。この写真はちょうどその時彼のいた廊下と彼の位置を示してある。彼はこの病院で負傷しなかったたった1人の人間だったので、異様な姿をして訪ねてくる被害者たちの治療のため三日三晩不眠不休の英雄的な

活躍をした。今でも彼はその病院にいて、原爆症患者の治療と研究に若い情熱を捧げている。



60頁 今尚市中にみることのできる九ツの特異な被害風景

(左) 皆実町のガスタンクは放射熱のため塗料がはげてしまった。われわれが22ページで見たハンドル輪形の映像は、要するに傍の輪が章が遺物の役をしたため、その部分の塗料がはげなかったわけである。同じ理由によってタンクの左下部に影が残っている。

(中上) 御幸橋は爆心地から2,300メートルも離れている。爆風を受けた欄干が横倒しになっているが、これはファインプレーとでもいいくらい美しく倒れている。

(中下) 元安橋の石の欄干に接近してみよう。両側の欄干の帽子が一方は右へ一方は左へすべり出している。橋の中ほどを、爆風が襲った証拠である。

(右) 広島神社は爆心地から非常に近い。この鳥居に簡単に懸っている額がああ恐るべき爆風の力を逃れたのは、爆風が襲った角度とこの額の傾斜角度とが一致していたからである。今、その額は下の写真でみるように取りはずされてしまった。



61頁 (上左) 爆心地から1,700メートル、横川駅の近くにあるこの樹木は一旦丸裸にされたが、その後、芽を出し葉を生じた。しかし、学者の説によると、この現象は植物の余剰勢力のためで、いずれ3年後には再び枯れるだろうということだ。

(上中) 広島市庁は爆心地から1,100メートルの所にある。ここの鉄筋コンクリートの煙突には写真のようにヒビが入っている。

(下左) 国泰寺の墓石の中へ、どこかの石がああ瞬間に勢よく避難してきた。珍しい現象なので人々は未だに彼の移転を要求しない。

(下中) 市庁の窓に下されていたカーテンは爆風のためにちぎれて飛び、上部の廻転棒の部分だけが残った。

(右) 爆心地からわずか500メートルの距離にある山陽記念館の屋根瓦は特異な破壊作用を受けた。下図はその屋根に接近して撮影された写真。



62頁 われわれが訪問した更にもう6人の生存者

阿部余四男氏(左)は文理科大学の動物学の教授である。研究室にいた彼は閃光と同時によめいたが、その時ガラスの小破片が彼の顔面と半身に飛びこみ彼を負傷させた。彼の研究室の小動物や大きなサンショウウオは外見上その光線の影響を何も受けていなかった。しかし火災のため結局それらの動物は死んだので、阿部教授はああ時間から貴重な価値を生じた研究資料を永遠に失ってしまった。福井芳郎画伯(中)は衛生軍曹としてニューギニアへ赴任するため船出の日を待っていた。彼は同僚34人と共に宿泊していたテンマ小学校の二階でああ光りを見た。16人の仲間が一瞬にして打ちたおされた。彼は不思議にも肩にわずかの傷を受けただけだったので、直に火の海の中へ飛びこみ、その中を泳ぎながら衛生兵としての責任と義務を果たした。彼はヒロシマ洋画研究所のリーダーとして当時の忘れ難い幾つかの悲惨な場面を胸に秘して黙々と絵を描いている。

砲兵大尉西村泰造氏(右)は宇品の山で高射砲第十二中隊指揮所の所長をしていた。原子爆弾を抱いたそのB-29が広島市の西方に現われた時、測高機はその高度を9,500メートルと教えた。彼等の高射砲弾は8,000メートルしかとどかなかったので彼は部下に撃つことを断念させた。B-29が気球の如きものを3個おとして間もなく彼が稲妻のような閃光を見た瞬間、16フィートも飛ばされていた。市中へ出てみるとそこは丸で地獄だった。「われわれの眼は決して再びあのような光景を見てはならない」——未だに原爆症から解放されずに困っている彼は元の軍人調のある語調でそう結論した。

63頁 渡辺幸子さん(左)は東白鳥町の寺の住職の妻である。彼女は鐘楼の附近にいたとき原子爆弾は鐘楼を倒しその下へ彼女とその子供を押えつけてしまった。彼女はしかし生きていた。しばらくは実に恐ろしいような静けさがあった。彼女は間もなく夫に助け出されたが、不幸な子供は翌日の夕方犠牲者の仲間に入った。冷たい子供と共に夫の背に負われた彼女は熊野村へ避難して行く。その後



典型的な原子爆弾症にかかって頭髪も脱げ下痢もつづいたが、自宅での治療で健康を取りもどすことができた。1946年10月に女兒を生んだが、その子には影響もあられず、今、元の寺で健康に育っている。

坂戸文子さん(中)は今、広島郊外で生花の師匠をしている。彼女はあの頃町の町会事務所へ勤めていた。その朝、通勤の途中横川駅の踏切りでその光りをみた。爆風と熱線は彼女の衣服を小片にして吹き飛ばし、残った部分を燃やしはじめたので、彼女はあわてて傍の防火水の容器の中へ飛び込んだ。このような体験をした彼女は不思議にも特別な症状を意識しなかった。ただ火傷の傷口へ化膿菌が侵入したためその治療に7ヶ月も日数を費した。

瀧川浩君(右)は中学の1年生である。彼は爆心地から1,900メートルの比治山橋の東方で500人の学友と共に勤労奉仕をしていた。あの物体の爆発の瞬間に彼は両脚と半面を放射熱に焼かれた。頭部には帽子が乗っていたのでその部分だけが痕になって残っている。彼は身体が自由がきくことを知ると1人の級友と連れだって自ら似ノ島の治療所へと向った。午後2時頃多勢の瀕死の患者のいる目的地へ着いた。彼は両親や姉が何処にどうしているのかを全く知らなかった。翌年の10月、彼が宇品の収容所に移されていたとき初めて姉の訪問を受けた。その時うれしいよりも身体がいたかったと彼は告白している。今は八百屋をしている両親の所から通学している。



64頁 日本赤十字広島病院にて

われわれは佐々木博士のいる病院を訪れている。この病院は再び活動をはじめている。しかしここにも平木化代子さんのように原爆による何人かの負傷した看護婦が働いていた。病室には第1号患者として知られている吉川清君を初めとして何人かの原爆患者が横わっていた。

(左) 平木化代子嬢

(上左) 破壊焼失当時の日本赤十字広島病院と(上右) 復興修理後の同病院。

(右下) 第1号患者。吉川清君はライフ誌によって世界に紹介された。彼は彼のケロイド症状が世界の平和へ何ものかをもたらすなら研究資料として自己を提供するためアメリカへ行こう、といっている。



65頁 (左上) 外科室。ここでは未だにかなりの数の原爆患者を扱っている。

(左下) 耳鼻咽喉科。この病院のドクターたちは誰もかもが原爆患者を手がけているので、誰もかもがそれぞれの専門において原爆症の権威である。

(右) 廊下の壁に窓ガラスの破片が飛び散った。あの時以来そのままに残っている。



66頁 民主化運動

原子爆弾は広島を犠牲として戦争を終結せしめた。平和と共に日本の民主化もたらされた。広島の悲惨な犠牲は日本の民主主義革命を生んだのである。広島の2度目の誕生は実に又日本の2度目の誕生でもあった。

(左上) 民主選挙に於ける候補者たちの無数のポスター。

(左下) 候補者の馬車宣伝——紙屋町通り

(右上) 豆自動車宣伝隊——広島駅前通り

(右下) 騎馬による宣伝——八丁堀通り



67頁 政治的無知の中に縛られていた日本人たちに占領軍は自由に花束を贈った。日本人たちは彼等自身の意思によって神聖な投票権を行使する。

(左上) 選挙人名簿は彼女が代理人でないことが確かめられる。

(下左) 投票する広島郊外の農婦たち

(下中) 記名と投票の場面

(右) 「記名の自由」を他人に犯されないための設備。



68頁 甚だしい搾取に苦しんでいた労働者にも自由の日がきた。広島は「世紀の閃光」の翌年、明るいメーデーを持った。そこには暴力も弾圧もなかった。日本には曾て1度も弾圧と暴力の伴わないメーデーはなかった。日本の指導者たちが戦争準備を始めた頃からこの傾向は一そう激しくなり、1936年以来全く禁止の運命に会っていた。——広島駅前広場のメーデー大会。



69頁 (左上) 新日本の建設を誓う委員
(左下) 全日本海員組合の一団
(右) メーデー行進(ハッチョーポリ街)



70頁 彼等は広島の大犠牲を忘れたのではない。彼等は彼等自身が生き得た喜びを表現しているのではない。彼等は日本の「自由」をたたえ、苦難の中にある広島を鼓舞しているのである！

(左) 祭礼のミコシ
(右上) 海田市町のカグラオドリ
(右下) 繁華街広場のボンオドリ



71頁 (右下) 元陸軍病院跡に建設された集団住宅街。



72頁 広島は果して復興しただろうか？

(左) 繁華街の直ぐ裏通りにみられる住宅。
(右上、下) 川口に浮かぶ住宅。この住宅は曾て客を乗せてカキ貝を採集し飲食を接待した料理船である。



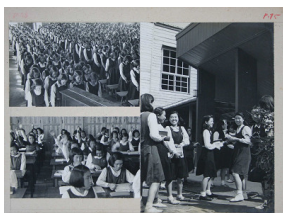
73頁 (左上) 京橋川のほとりに見られる住宅
(左下) これら二つの住宅は住宅の名に価するものだろうか。ここにはそれにふさわしい生活がある。
(右) 元大本営跡のアベック——ある場合には人間は住宅を必要としない！



74頁 たち上る広島の若い世代

広島苦難を実際に切拓いて行くものは青年男女である。彼等は心豊かに愛し合い尊敬し合い励まし合いながら第2の広島を育てるであろう。芸術家が彼の作品を生むように...

(左) 広島の洋画研究所
(右下) 洋画の移動展覧会
(右上) この男女共学の場面はメリー・マクミラン女史の自宅の一室である。英文聖書の講義をする彼女は広島ミッション・スクールの先生である。



75頁 広島高等女学校。爆心地から1,100メートルしかない校舎は無論焼失した。主としてアメリカのメソジスト教会本部伝道局の募金により新校舎が建てられた。

(左上) 広島ミッション・スクールの無数の若い生徒が広島復興に捧げる祈り。
(左下) 軍国主義者の干渉から解放された自由な教育が彼女たちの未来を明るくしている。

(右) 休憩時間

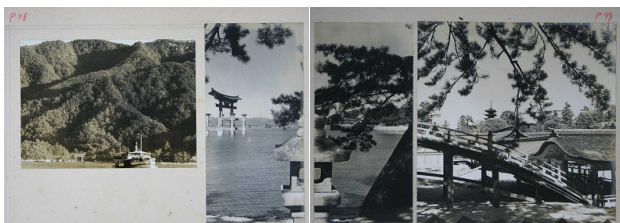


(ツ脱)
76頁 屋外レスン



77頁 楽々園海水浴場

若さは「自由」を育てる！



78—79頁 イツクシマ

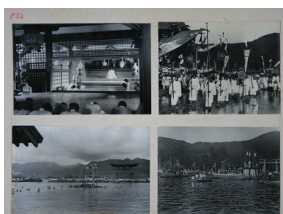
広島市から20キロメートル、ジープを走らせれば20分くらいで、宮島口に着く。そこから船で広島を訪ねよう。若し諸君が欲するなら広島市から汽船を利用することも出来る。このコースは瀬戸内海の美しさを、ほんの少しだが諸君に理解させるだろう。もっと深い理解のために、われわれは後のページでこの瀬戸内海を諸君と共に見物する機会を持つであろう。



80—81頁 舞楽 イツクシマ神社には非常に興味のある「舞楽」という古い踊りが伝わっている。今では宮廷とこの神社だけにしか残っていない。

80ページの各場面は「リョウオウ」という舞楽で、仮面をかぶっておどる勇壮な独舞である。次のページのは「タイヘイ」という群舞である。どちらも1,300年昔そのままの型である。

(左側写真原稿の左下1枚と右側原稿のうちの4枚は、完成本では使用されていない)



82頁 (左上、下) イツクシマのタマトリ祭。海の中に4本の柱を立て、その天井に宝珠をつるして、それを裸の男たちが競争して奪い合う珍奇な祭り。上は競技の場面、下は神社前に於ける儀式

(右上、下) イツクシマのカンゲン祭。日本の古代のオーケストラを再現する祭り。三種類ずつの管楽器と絃楽器と打楽器とが用いられる。上は管絃楽隊を乗せた船、下は古式な楽隊行列

(完成本では上下が逆の並びになっている)



83頁 (右)干潮時の大鳥居をくぐる管絃楽隊。(右上、下)イツクシマ神社のまわり廊下は全体の長さが190メートル。8つの曲り角を持っている。



84頁 島へ上陸するとそこには街がある。珍しい土産が諸君の注意をひくだろう。
(上左)散歩。(下左)店頭スナップ。(下中)店頭の日本美人。(下右)店頭
のG、I。
(上中)木刻人形を製作する老芸術家。(上右)木盆に彫刻する作家の手。



85頁 われわれはこのページから以後、平和都市広島を取巻く風景や風俗を紹介するだろう。快適な列車が諸君を案内する。
(左上)広島駅前。(左下、右上、下)広島駅構内における外人観光客の為の特別列車。



86頁 サンダン峡

谿谷の美しさを知りたい人は「三段峡」を訪ねなさい。広島駅から70キロ余。広島市を流れる七つの川の上流にある谿谷である。
(右上)三段峡の入口。(右下)阿原。



87頁 (左)お望みによっては、素朴で美しい「谷間の日本娘」が諸君の案内役をつとめるだろう。(右)滝



88頁 三段峡の入口には、非常に古い大きな農家がある。ここの主人は非常な喜びを以って諸君を接待するであろう。
(上左)農家の外観。(上右)同じく門
(下左)この農家の窓からは山の上まで耕された水田がみえる。
(下中)此水田の位置から農家を遠望した写真
(下右)主人は封建時代の珍しい交通機関をみせてくれる。



89頁 (左)その農家の主人は諸君の求めに応じていつでも「茶」の会を催してくれる。
(右上)「茶」の礼式を会得する英国婦人。
(右下)「茶」の接待を受けながら説明を聞く将校たち。



90頁 典型的な日本の農村

広島駅から芸備線を利用する小旅行に於て諸君は日本の典型的な農村を見ることが出来る。
(左)原子爆弾を知らない子供。
(上中)稲を収穫する農夫。(上右)豊作を喜ぶ農婦。(下中)稲を取入れる婦人。
(下右)稲をたばねる婦人たち。



91頁 (上左、右) 代表的な農家の建物。牛も家族の1人?として建物の一部に住居を持っている。
下、左から(1) タキギを背負って帰る農村婦人。
(2) この背負器具は全部木片で出来ている。
(3) これは全部竹でつくられてある。(4) 水車。この動力を利用して収穫物を加工する。



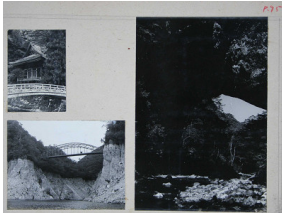
92頁 芸備線の七塚駅附近の牧場。49,600平方メートルの高原地帯が展望される。この高原はサクラの名所として有名だ。



93頁 芸備線の吉田口で下車して附近を歩くと、そこには見事な梨畑が展開している。夏から秋へかけてならば乙女たちが新鮮な梨を無制限に提供してくれるだろう。



94頁 三次の鵜飼。芸備線の三次駅から約1キロ、三次町で漁夫がこの町を流れる川で珍しい漁獲方法を紹介してくれる。ウを使ってアユをとるのである。ウはアユが好きなので水にもぐってその魚をのみ込むが、首に輪がはめてあるのでのみくだすことが出来ず遂に漁夫によって吐き出させられる。しかしこの漁獲法にはウを使いならず熟練した技術が必要だ。

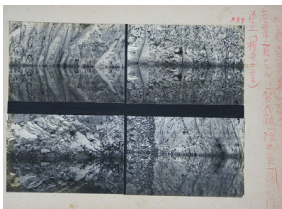


95頁 帝釈峡

帝釈峡は広島県で特異な風景美を示している。三段峡と同じく此処も豁谷であるが、石灰岩を土台にした奇怪な風景が諸君を驚かすであろう。芸備線の東城駅から自動車を利用する。
(左上) 帝釈峡の入口。(左下) モミジ橋。秋になると附近の樹木は紅葉する。
(右) オン橋。自然にできた石灰岩の橋である。



96頁 (上左、中) 帝釈峡には大小無数の鐘孔洞(石灰洞)がある。下図左は洞の中のウロコを生じたように見える石灰。右は(月の出)のような形の珍しい石灰石。
(下左、中) 帝釈峡にあるシンリュウ湖の石灰岩壁。鏡のような湖水面は真青で底が見えない。岩壁に近づいて注意深く見ると、サンゴや貝殻の化石が附着しているのを発見するだろう。
(右) この地方にはサンショウウオが繁殖している。日本の天然記念物として政府が保護している。アメリカのユタ州、ソートレーキ市の動物園には日本から寄贈されたサンショウウオがいる。



(完成本では使用されていない写真原稿)



97頁 (左上、下) 帝釈峡の川は湧水期には川底が見える。川底は石灰岩なので下図のようにサケ目ができる。
(右) 芸備線、道後山駅から12キロメートル、有名なスキー場がある。11月から3月までスキーに適している。広島県は諸君のためにあらゆる設備を整えてスキーファンを待っている。



98頁 (左)われわれは最後に福山駅で下車することになる。福山市では日本の典型的な「城」を見物することができる。

98-99頁 日本酒 西條の町では日本で最も品質のよい酒をつくっている。材料が良質であるばかりでなく、その製造プロセスの間に他のマネのできない秘密が幾つかある。酒は米が材料だ。米は日本人の主食だから無制限につくることは禁じられている。しかし、諸君が賞味するに足る分量だけは十分に貯えてある。ウイスキーとは全くちがった独特の異国的な味と香りとが諸君を満足させるだろう。(左)酒の貯蔵庫 (右)糖化された米。(右側は完成本では未使用)



(完成本では使用されていない写真原稿)



(完成本では使用されていない写真原稿)



100頁 呉市の郊外にある山上から瀬戸内海を望む。この山上には砲台があった。



102頁 呉軍港の跡

呉は日本海軍にとって50年来の最も重要な港であった。一切の写真撮影は勿論、旅客機がこの都市の上空に近づくことも許されなかった。われわれは、今、公然とクレ軍港を紹介することが出来る。

(上左) 広大な海軍工廠は鉄骨の残骸となった。

(上右) 沈没した日本の軍艦アカギの断片を見ることができる。

(下左) 上陸用舟艇が罪人のようにつながれている。

(下中) 砲弾はやがて溶鉱炉に投げられ平和産業のために利用される。

(下右) 破壊された港は今尚整理中である。



102頁 呉市

呉市も亦急速に復興しつつある都市の一つである。ここに見る4枚の写真は、いずれも占領軍を相手に土産物売る店である。戦争中禁じられていた英文看板が今はどこにでもみられる。



103頁 呉市の夜景



104頁 日曜日を利用して占領軍のG.Iたちは楽しい小旅行を試みる。そのためのクラブが組織されているくらいである。ヒロシマ県の風景や風俗や設備は十分に彼等の小旅行を楽しませている。

(上左) 呉 広島間ドライブウェイ (下左) 呉 可部間ハイキング、ウェイ
(上右) 呉 吉浦間ドライブ、ウェイ (下右) ヨシガセ発電所附近の風景



105頁 江田島

江田島は日本海軍の兵士たちを特別に訓練した所だ。特攻隊の若い兵士たちの多くはこの附近で訓練され、天皇のためにといて喜んで死んで行った。今、此処は占領軍の家族たちのために開放されている。

(上左) 曾ての海軍の学校は今占領軍のための病院となった。

(上中) この建物は今は愛と平和を祈る教会となった。

(上右) 占領軍司令部

(下) 占領軍家族住宅、美しい海と新鮮な空気にとりまかれた生活を彼等は楽しんでいる。



106頁 瀬戸内海海上公園

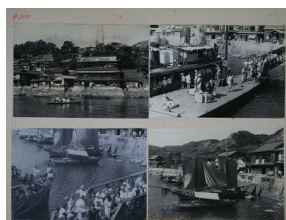
典型的な日本風景を十分に楽しむためには、瀬戸内海公園がある。汽船による海上の散歩は必ず諸君に豊富な話題と思い出をもたらすであろう。以下われわれは諸君と共にこの内海を注意深く見物するだろう。

(左) 倉橋島附近の帆船

(右下) 倉橋島、室尾港の俯瞰



107頁 瀬戸内海倉橋島のクソオ山からは瀬戸内海の大小の島々がはっきりと眺められる。この山上からの眺めは、他の如何なる地点からの眺めよりも美しいとされている。



108頁 ここに見る四枚の写真は、いずれも音戸海峡で撮影された。650年前に切り開かれた、内海で最もせまい海峡である。

(上左) 音戸町 (上右) 発着所で船を待つ人々。(写真原稿では左下) (下左) 帆をあげた漁船。(写真原稿では右下) (下右) 発着所についた汽船。(写真原稿では右上)



109頁 倉橋島は要塞地帯であったから、この美しい風景は、土地の人以外は誰も知らなかった。写真はいずれも海岸づたいの道路所見。



110-111頁 今しも山上からイワシの大群を発見した、「魚を発見する達人」が海岸の若者たちに信号をしている。若者たちはその信号を受けて漁船を漕ぎだす。「発見の達人」の信号に従って彼等は船を止め、網を投げる。間違いなくイワシやその他の魚が大量に収穫される。彼等は海岸に帰って来て網の中の魚を整理する。



諸君の好みそうな魚は、いきたままで海水池に泳いでいる。お望みによってそれらの魚は、すくい上げられ、巧妙な手さばきで料理される。一流のコックが諸君の食膳に日本独特の「天ぷら」料理をそなえるであろう。

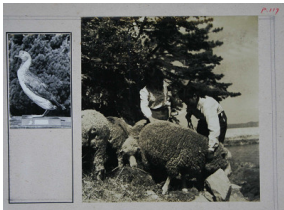


112-113頁 倉橋島、室尾港風景

漁民たちはアミによる勇壮な漁獲法を見せてくれる。左は砂地に乾してある魚網、中の写真はいつでも出動出来るように待機している漁船。右は海岸から見上げた階段畑、つまり新鮮な魚と野菜が諸君を待っているという次第です。



114頁 (上左)ムロオ港の山上には大規模な陣地があった。そこには空襲を避けるために穴が深く掘られてあった。(下左、右)高射砲陣地。日本人は陸軍の力を絶対に信頼させられていたが、実はこれらの高射砲はB-29の高度までは届かなかった。



115頁 アビ(怒り鳥)

忠海の海上では毎年2月頃、この鳥が現われて鯛の所在を知らせる。漁夫たちはこの鳥を神の如く崇拝している。アビはイカナゴを好むので、この鳥が現われると、イカナゴは深いところへ逃げる。同じくイカナゴを好む鯛が、好機を逸せずその餌の周囲に群がり集ってくる。漁夫たちはこの好機を捕えるのである。(左)(右)大崎島には日本には珍しい緬羊がいる。千頭くらい飼育されているが、これらは主として住民の自給自足用に利用される。

写真なし

116頁 オレンジ畑。御手洗附近。



117頁 静かな波の上を散歩しながら少し注意して見ると、そこには過去の軍国日本を物語る材料がいくらかでもある。このページで我々は呉沖を通過する。(上左)呉沖の英国軍艦 (上右)旧海軍工廠の遠望 (下左)沈没した日本航空母艦 (下右)軍艦「イセ」の前部艦橋を利用した住宅。

写真なし

118頁 瀬戸内海の汽船

日本では捕鯨船以外に大きな船をつくるのが禁じられている。しかし瀬戸内海公園を散歩するためには、余り大きな船は必要でない。海上はいつでも春の野原のように静かだからだ。完全な設備さえあれば、1,000トンくらいの船でも、快適な遊覧旅行ができる。

(左)三菱造船会社が製造された「平和丸」(1,000トン)が進水するところ。この船は関西汽船会社の所属で神戸や別府温泉へまでも出かける。

(右)内海を航行する「平和丸」



119頁 (左上) 遊覧客に説明する船長(完成本では左下)
(左下) 戦後つくられた最も新しい汽船。170トン。(完成本では左上)



120頁 倉橋島海岸夕景



121頁 山上から眺めた尾道港の風景



122頁 生口島の瀬戸田に耕三寺がある。古式と近代式とを組合わせた建物が諸君の興味を引くだろう。ここには幾つかの国宝がある。遠望される海岸には塩田がある。



123頁 5(上左、中) 仏像2体 (下左) 本堂内の壁面にあるレリーフ (右) 仁王像(国宝) われわれは23ページで仁王のことを知った。



124頁 因島には近代的な設備を持った造船所がある。今ここでは捕鯨(船脱カ)が建造されている。左図はハシダチ丸(12,000トン) 右図はタドツ丸(9,000トン)



125頁 瀬戸内海沿岸には至るところに塩田がある。気候がよいので太陽熱と海水とを利用して塩を作ることができる。右は塩水と砂との田を特殊の器具でかきまぜたあとの美しい模様。



126頁 鞆港の帆漁船

- 写真なし 27頁 尾道郊外の吉和という貧しい農村では、殆んどが住宅難のため海上生活をしている。
- 写真なし 128頁 尾道港の夕ぐれ。